

ご挨拶

■「こころざし」を持ち誠実に生きた証を世に問う



徳島大学薬学部長

高石 喜久

Yoshihisa Takaishi

徳島大学薬学部並びに大学院薬科学教育部へ入学又は進学された皆様、おめでとうございます。皆様は将来、創薬研究者又は医療人として専門的な知識や技術を基に社会に貢献する重い使命を負うこととなります。薬と言う化合物に関する専門家として社会から大きな期待を寄せられることとなります。それは、薬を作る、薬の効果を高める、薬の効き方を調べる、薬を効きやすくする、薬を正しく安全に使う、薬の情報を正しく伝える等あらゆる分野に渡ります。どの道を選ぶかは大きな選択枝ですが、自分の適性と能力を充分判断し、自分の信じた道を進んで頂きたいと思えます。そしてこれからの学生・院生生活を満喫して頂くと共に、将来立派な創薬研究者又は医療人として社会に貢献できるよう、有意義な学生・院生生活を送って下さることを期待しております。

薬学部を紹介する意味で現在進んでおります長井長義先生の映像製作について紹介します。現在映像化は「徳島大学長井長義映像評伝実行委員会」を中心に進められており、本年6月ごろにはキャストなどの記者発表、8月-10月頃撮影、2011年3月末完成の予定です。本学部での撮影もあるかも知れません。長井先生の映像を何故

薬学部発で作るのか、何故今作るのか等について以下紹介します。

1. 徳島大学薬学部と長井長義先生の縁

徳島大学薬学部と長井長義先生との縁は1922年、先生が地元の有志と協力して製薬業の盛んな徳島県に製薬技術者養成機関を設立することに努力され、我が国唯一の工業系薬学として徳島高等工業学校内に製薬化学部を設置されたことに始まりました。その後、1954年、当時の徳島大学学長児玉桂三先生が会長となり、「長井長義先生顕彰会」を発足し、長井先生の遺徳を顕彰するため、徳島城公園内に胸像を建設しました。この胸像は残念ながら時と共に人々に忘れられるものとなり、1973年徳島大学薬学部創立50周年記念事業の一環として、薬学生が集う薬学部校内に記念庭園を設置して移築し、先生の御遺徳を永遠に讃えることとしました。1990年長井先生の御令孫長井貞義氏とその御家族の多額の寄付により薬学部建物の隣に長井記念ホールが建設されました。これは長井家と徳島及び徳島大学との一世紀に渡る深い縁を、次代に引き継ぎたいとの貞義氏の御意志の表れでありました。

2. 長井先生の資料収集

日本薬学会第119年会（1999年）が徳島で開催されることとなり、私達はこれを記念し長い間日本薬学会会頭を務められた長井長義先生の功績を徳島県民と薬学会会員に知って頂くため「日本薬学の開祖 長井長義展」を徳島城博物館で開催しました。その後、この展覧会で集めた資料を解析・整理し後世に伝え、薬学教育・研究に生かそうとする本学部の意図に対し、多くの遺品所蔵者等から理解が得られ、資料の殆ど全ては、薬学部に移管し、整理・保存を図ることが了解されました。これに対応し薬学部では「長井長義資料委員会」を設置し、資料の収集・整理と功績の普及に努めることとしました。平成17年、長井家より、長井家所蔵の博士に由来した遺品・資料、約800点が本学に寄贈されました。

これは明治・大正・昭和に渡る日本薬学界の歴史を語る貴重なもので、博士の長崎留学時旅日誌の原本、手紙、日本最初の博士号等を含む膨大なものです。

3. 薬学部玄関の青石

私たちの学部では卒業式当日に学業優秀者に「長井賞」の授与、薬学関連学術集会「長井記念シンポジウム」を数年に1回開催しています。また、平成14年薬学部建物改築時、玄関に長井先生が長崎旅立ちの時踏んで行った青石を設置しました。この青石には「こころざしある若き学徒が、将来世界の薬学を背負って立つ人になるよう歩んで欲しい」との私たちの願いを込めています。

4. 長井先生の映像化－「こころざし」を持ち誠実に生きた証を世に問う－

この様に私達は学部創立の縁を大切に、数多くの人々の助けを借りながら、長い時間をかけ長井長義先生の資料収集と功績の普及に努めて来ましたが、これら資料の中で見られる先生像は激動の次代を「こころざしを高く」持ち、「誠実」に生きられた姿です。私たち徳島大学薬学部は、この先生の生き方を世の人に広く知ってもらい、現在国家プロジェクトにもなっている「創薬研究」の啓蒙に寄与する大きな願いを込め「長井長義博士の映像化」に取り組むことにしました。激動の時代に徳島から世界に目を向け活躍した郷土の先駆者が「こころざし」を持ち誠実に生きた証を、徳島の地から世界に発し、今の世にも通じる先生の生き方を知って頂きたいとの強い思いで本企画を進め、やっと実現する所まで来ました。

皆様方のご協力をお願いしますと共に、この企画に対し皆様方の暖かいご支援をお願い致します。



長井長義博士 胸像

実務実習

■実務実習の開始に向けて



薬学科長・実務実習運営委員会委員長

滝口 祥令

Yoshiharu Takiguchi

医療人としての実践的能力を持つ薬剤師養成を目的とした薬学教育6年制の改革の柱のひとつである、22週間に及ぶ病院および薬局（各11週間）での実務実習が、薬学科5年生を対象にいよいよスタートします。本年度は、2班に分かれて徳大病院と市内17薬局で、Ⅰ期（5月14日～7月30日）とⅡ期（9月6日～11月19日）に実施されます。実務実習は単に期間が長くなっただけでなく、内容が従来の見学型から学生が実際に調剤し、患者と対応するなど可能な限り現場の薬剤師と同じ業務を実施する参加型へと大きく変わっています。そのため、資格を有しない実習生が薬剤師業務を行うために、幾つかの基準が設けられました。

まず、実習生には適切な薬学知識と技能・態度を有することが求められ、4年次に183時間の実務実習事前学習を受けた後に、実務実習を行うに必要な知識を評価する客観試験 CBT (Computer-based testing) と技能・態度を評価する客観的臨床能力試験 OSCE (Objective structured clinical

examination) からなる共用試験に合格することが必要条件となっています。事前学習は昨年10-12月にかけて全教員が分担して実施されました。そして、今年1月に共用試験が実施され、全員無事合格し、本年度の実務実習に臨むことができました。

一方、実習は適切な指導者の下で行うことが条件となるため、実習生を受け入れる病院・薬局には、実習生を指導・監督する指導薬剤師を配置することが必要となりました。そのため、実習施設の薬剤師の先生方には、学生指導のために業務多忙中、認定指導薬剤師養成のためのワークショップおよび講習会に参加し、認定資格を取得して頂いています。

その他、本学では実務実習に新しい取り組みが導入されます。指導体制を充実するために、徳大病院での実習では、臨床薬学3分野と臨床薬学実務教育室が、病院薬剤部と連携して直接指

導に当たります。一方、薬局実習では、指導薬剤師と連携して学生個々に配置した担当教員と臨床薬学実務教育室が訪問指導に当たります。その際に、有用なツールとしてポートフォリオを活用します。ポートフォリオは、医師・看護師等の医療人教育ですでに用いられていますが、学習目標や学習過程を記録した学習の成長記録で、学生の目標到達状況等の情報を教員・指導薬剤師が共有することで、きめ細かな指導に役立っています。また、学生の能動的学習を支援する教材として、ポートフォリオに利用できる実習テキストを作成しました。

この様に、教育改革の趣旨に沿った実務実習の充実に向けて、学部および実習受入施設が連携して準備を進めてきました。実習生の諸君には、是非高い目標と自覚を持って実務実習に取り組み、臨床現場での体験を通して医療人として成長することを期待します。



実務実習テキスト

研究設備充実

■ 新しい核磁気共鳴装置が設置されました！



分子創薬化学分野 教授

佐野茂樹

Shigeki Sano

徳島大学薬学部中央機器室の400MHz核磁気共鳴装置2台は、日常的高頻度の使用にもかかわらず耐用年数をはるかに超えていたことから、分析性能や安全性に大きな問題を抱えており、早期の更新が望まれていました。折しも、平成21年度予算成立直後に麻生内閣が策定した「経済危機対策」の一環として、「底力発揮・21世紀型インフラ整備」を実施するという施策が打ち出されました。「底力発揮・21世紀型インフラ整備」には「国立大学の基盤的整備・最先端設備の整備」が盛り込まれており、質の高い教育研究を支える基盤的・汎用的設備や教育研究の一層の高度化を実現することが目的として掲げられました。そこで、徳島大学薬学部では「創薬化学研究を推進するうえで必要不可欠な合成有機化合物や天然有機化合物の構造解析、タンパク質等の高分子解析、化学反応の変換過程や分子間相互作用の解析等に使用し、学部ならびに大学院学生に有機化合物の構造解析能力の基礎知識や技術力を修得させる」ため、既存核磁気共鳴装置2台の更新を申請しました。その結果、当該設備整備補助金が交付され、平成21年度末に2台の核磁気共鳴装置が更新設置されることになりました。政権交代後の平成21年9月下旬には、補正予算に盛り込まれた国立大学法人施設整備事業が一時凍結となりご心配をおかけしましたが、最終的には予定どおり年

度内の設備更新が完了しております。

今回導入された核磁気共鳴装置はブルカーバイオスピン社製のAVANCE III 500およびAVANCE III 400Nで、自動測定ソフトウェアIcon-NMRと高速かつ高精度な自動シムTOPShimを搭載しています。さらに、両装置とも60試料用のオートサンプルチェンジャーと低温測定用のガスチラーを備えており、更新前の機種に比べ有機化合物の構造解析性能ならびに効率の大幅な向上が期待されます。また、AVANCE III 500では5ミリプローブの他に3ミリと1.7ミリのプローブが利用できますので、微量試料の測定に抜群の威力を発揮してくれることでしょう。一方、今回の設備更新にあたりましては、安全対策にも十分に配慮した測定環境の整備を心がけました。ご存知のように、核磁気共鳴装置は何らかの原因で磁場消失（クエンチ）を起こす可能性があり、クエンチが起こると液体ヘリウムと液体窒素が爆発的に蒸発して安全弁から噴き出し、測定室内の酸素濃度を急激に低下させてしまいます。掲載した写真は旧核磁気共鳴装置を廃棄するために消磁作業（強制クエンチ）を行った時のものですが、通常測定時に同様のクエンチが起こる可能性もゼロとは言えないわけです。そこで、これまでの酸素濃度計をより高性能なものへ更新するとともに、クエンチ時には自動的に排気が行われる強制排気装置を導入し、外部警告表示も新たに設置することにより、



消磁作業（強制クエンチ）



500MHz 核磁気共鳴装置

万が一の事態にも安全に対処できる測定環境を整えました。

核磁気共鳴装置の具体的な設置作業は次のようなスケジュールで進められました。すなわち、旧装置の消磁作業と搬出作業を平成22年2月12日と19日にそれぞれ実施し、空調設備や電源等の室内整備を行った後、3月26日に新装置を搬入、設置いたしました。4月上旬にはユーザーならびに責任者講習を実施し、約1ヶ月の試運転期間を設け、ユーザーのみなさんに新しい装置を実際に使用していただくことができました。5月の連休明けには再度のユーザーならびに責任者講習を実施し、5月中旬から本格的に運用を開始する予定です。今後、新しい核磁気共鳴装置が基盤的・汎用的設備として最大限に活用され、質の高い教育研究がより一層推進されることを期待します。

最後に、核磁気共鳴装置の導入にあたりご支援・ご協力を賜りました中央機器室・北池秀次技術専門職員をはじめとする仕様策定委員会委員、技術審査職員、蔵本会計事務センター職員の方々に対し厚く御礼申し上げます。



屋外から見た強制排気装置

学術国際交流

MY ACADEMIC SOJOURN IN JAPAN



Jadavpur University, INDIA

Dr. Sanmoy Karmakar

JAPAN, the land of the rising sun fascinated me even before I got this beautiful opportunity for this year-long research sojourn under the Government of India BOYSCAST Fellowship program. I had the choice of going either to Japan or New Zealand (University of OTAGO). I chose the former because of my fascination with things Japanese. I was intrigued by her rich culture, advanced science and technology, disciplined lifestyle, healthy food and long life span of the Japanese besides many other things. However, my long and tiring flight to Japan from India with my wife and son almost dampened my enthusiasm, but my first view of the technological grandeur of Japan at the Kansai International Airport immediately made up for it.

On my way to Tokushima, it was astonishing especially for an Indian to find the airport limousine traveling almost vacant. We settled

down in one of the apartments in the International House of Tokushima University at Kitajima. Initially, I felt as if I was surrounded by absolute silence since my city, Kolkata in India is notoriously noisy and crowded. With all the excitement of being in a different country far from home, we began our life in Japan hoping to enjoy it all.

As expected, our life turned out to be very enjoyable and fulfilling. It is thanks mainly to the care and help rendered to me and my family by both of my sensei Prof. Hiroyuki Fukui and Dr. Hiroyuki Mizuguchi. Our heartfelt gratitude goes to them.

The primary objective of my visit was to find potential plant source for novel anti-allergic molecules amidst the vast resources of traditional Indian Ayurvedic medicinal herbs. I can still recollect my first sight of Tokushima University and the warm welcome extended to me by my Sensei. "Welcome to my little lab" he said although his lab is quite big. Thereafter, I gradually settled down to my research work. I appreciated the perseverance of Japanese students who also taught me some techniques of molecular pharmacology although they are mostly of my students' age.

Foreigners in Japan are often found to mention about cultural shocks. But I really did not experience anything which might be called a cultural shock. I think it is due to the similar food habits and social behavior characterized by calm and submissive gestures between the Japanese and Indians.

There have been many people both foreigners and Japanese who helped me whenever I had trouble due to my inability to speak Japanese or read Kanji. Once I was even ashamed to receive help from a Japanese man who walked with

me all the way from Sako railway station to the bus stop on Route No. 192 which is probably more than 500 meters away. He even kept on waiting till he got me on the correct bus for my destination. On the contrary I have also noticed in trains and bus some middle-aged women who put their bags next to their seats instead of allowing standing passengers to sit near them.

Our stay in Japan was made all the more fascinating and wonderful by the opportunity we took to travel to some other parts of Japan like Takamatsu, Osaka, Kobe, Hiroshima besides places within Tokushima. Tokushima city is very conveniently located for traveling to many tourist attractions in Japan. But the public transport within Tokushima seemed to be a bit expensive for me. Accordingly, I opted for taking the Japanese Driving license test which I passed in my first attempt although it was quite tough even for an experienced driver like me.

Despite the very high price index of Japan, it was interesting that the price of my used car was much cheaper than the price of my digital camera. If I say this to my Indian friends, they will find it hard to believe. The same goes about the price of water melon in summer which is higher than the price of an electric fan. These were some of the surprises.

I loved looking at the mountains while going to my university and I really enjoyed watching the rice paddies grow and change color through the course of the year. Japan has four distinct seasons each with its own charm. This spring, my family and I were lucky enough to partake in the visual feast that the demure beauty of cherry blossoms provided. But one does not have to wait only for spring to enjoy such beautiful sights in Japan. With a good sense

学術国際交流

of observation, one can enjoy a wide variety of flora and fauna which grace this land throughout the year.

I am also thankful to TIA (Tokushima International Association) for making it possible for me and my family to enjoy their programs which included camping in Kisawa and trekking up to the top of the highest mountain of Tokushima, Mt. Tsurugi while enjoying the famed autumn leaves of Japan.

Before coming to Japan, I had read that the long and healthy life of the Japanese had much to do with their food habits. As an Indian, initially I found the local food quite bland and undercooked. However, my taste gradually adapted and I found Sanuki Udon, Sashimi and Sushi very delicious. Sushi with a little excess of Wasabi after a nice drink of Japanese traditional Sake has occupied a special taste for me now.

One year is probably too short a period to enjoy and experience all that this beautiful country has to offer. From vibrant metropolises to rural retreats, from tropical beaches to lofty mountain peaks, from world-class hotels to traditional Japanese inns, Japan has it all for everybody. However, our short stay in Japan has enriched our souls and uplifted our spirits, and we leave with many beautiful memories to cherish for the rest of our life. Thank you!

20年を数えるソウル大薬学大学との学術交流



生薬学分野 准教授

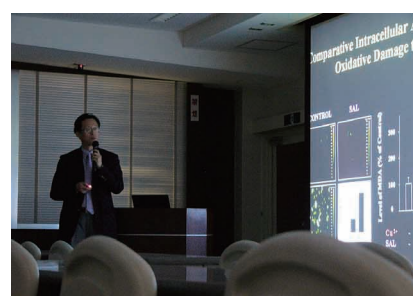
柏田 良樹

Yoshiki Kashiwada

平成22年3月9日にソウル大薬学大学より2名の先生を迎え学術交流会が行われました。

ソウル大薬学大学は、1946年に9単科大学と1大学院の韓国で最初の国立大学として設立された韓国最高峰の大学で、設立以来、韓国随一の研究設備、教授陣を有し、高い教育・研究水準を維持しています。徳島大学薬学部は平成2年7月18日にソウル国立大薬学大学と部局間協定として学術交流協定を締結して以来、両大学間での共同研究、教員及び学生の交流、講義・講演等の実施、学術情報及び資料の交換など、活発な交流を行ってきました。これまで隔年ごとにそれぞれの大学から数名の教員をお互いに派遣して学術交流を行っており、今回はソウル国立大薬学大学から、Kyu-Won Kim 教授と Young-Joon Surh 教授を迎

え、薬学部において学術交流講演会が開催されました。お二人の先生からは、それぞれ“AKAP12 Scaffolding Protein and Vascular Integrity”及び“Cellular Adaptive Survival Response to Oxidative, Nitrosative and Inflammatory Stresses”の演題で最新の研究の講演が行われました。講演会の後は、いくつかの研究室等を訪問・見学するとともに、薬学部教員と研究面におけるディスカッションが行われました。また、韓国においても薬学6年制教育が開始されることから、薬学教育における両国の情報交換や意見交換等を含めた活発な交流が行われました。当日の夕方には教員との懇親会が行われました。懇親会では、大学院薬科学教育部



博士後期課程在学の在日3世の韓国入学生が通訳をつとめ、それぞれの大学の教員が母国語で挨拶をするなど、非常に和やかな中で親交を深めることができました。

平成22年度は、徳島大学薬学部とソウル大薬学大学が部局間協定を締結して20周年を迎えることから、12月にその記念シンポジウムが行われる予定となっています。



薬学部長室で記念撮影

薬学生の活躍

■ 米国カンザス州立大学化学科の留学を終えて



大学院薬科学教育部 博士後期課程2年

菊地 大介

Daisuke Kikuchi

2009年10月から翌年3月にかけての6ヶ月間、米国カンザス州立大学化学科Duy H. Hua教授の研究室に留学する機会をいただいた。徳島大学では有機合成薬学分野で生理活性天然物の合成研究を行っているが、新たに創薬化学を学び直に生きた英語に触れるための渡米であった。

カンザス州はアメリカ合衆国中西部に位置し、牧畜が盛んに行われるのどかな地域である。また季節の温度差が激しいため冬場は何度も大雪に見まわれ、徳島に比べて非常に寒い日が続く。対照的にカンザスに住む人々はとても熱く、フットボールやバスケットボールのシーズンになると、学内はもちろん町中が大学のシンボルカラーであるパープルの衣類を着た人達で溢れ返る。バスケットボールチームがNCAAのベスト8に進出したときは、試合が終わったのが深夜にもかかわらず突然町中で歓声やクラクションが鳴

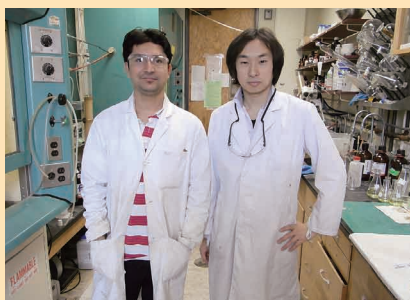


12月頃の大学の様子

り響きたいへん驚かされた。

カンザス州立大学はカンザス州中部のマンハッタン市にあり、自然に囲まれたキャンパスで皆研究に励んでいる。Hua教授の研究室では医薬品シーズとなる化合物の創製を行っており、私もこのプロジェクトの一部を担当させていただいた。アメリカの研究室は設備が日本とは多少異なるものの、実験自体は同じように行うことが出来た。一方、試薬や溶媒の取り扱い（レギュレーション）が法律で細かく定められており、日本より安全・環境面に対して厳しい管理を行っている印象を受けた。化学科に属する研究室は毎週共同でセミナーを行っており、ある時は学生が数十ページに及ぶ総説を作成し発表することもあり、学生は実験だけでなく非常に勉強熱心でもある。

Hua教授は留学生を盛んに受け入れており、研究室のメンバーにアメリカ人はおらず、中国やネパール・インド・南アフリカ共和国といった国からの留学生で構成されていた。なかでもネパール人の留学生とは特に親しくなり、何度か昼食に招待されネパール風スープカレーをご馳走になった。彼ら留学生は日本では修士課程の学生に相当するが、殆どが奥さんや子供と共に生活している。アメリカではこのような家族持ちの学生が生計を立てつつ研究できるような環境が整っており、この点で日本よりも進んでいるように思われる。そのため、彼らは同じ学生で



ラボの学生と



ラボのある化学科の建物

も私たち日本の学生とは違った価値観を持っており、文化や習慣の違いだけでなく、そのような学生や研究者としての価値観の違いにも触れることが出来た。



Hua教授と

留学中は英会話の勉強を兼ねてルームシェア型の学生寮で生活した。食事は毎食バイキング形式でメニューは充実していたものの、3ヶ月を過ぎた頃には日本食が食べたくなり、レトルトの味噌汁の素晴らしさを実感することになった。研究室では構造式や専門用語を使って会話ができるためあまり会話に苦労することはなかったが、学生寮では日常会話がメインなので、なかなか思うように自分の意思を伝えられず苦労することが多かった。時間が経つにつれて少しは上達してきたように思うが、英会話は帰国してからも継続して勉強していかなければならないと考えている。

6ヶ月間の留学を通して創薬化学研究における知識や経験に加えて、自分の価値観や物事の捉え方を変えるような出来事に多く出会えたように思う。この経験を今後の研究生活に生かしていきたいと考えている。

最後にこのような機会を与えてくださった宍戸宏造教授並びにDuy H. Hua教授に深謝いたします。

新任教員等紹介



医薬品情報学分野 教授

山内 あい子

Aiko Yamauchi

平成21年12月1日付けで、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部医薬品情報学分野教授を拝命いたしました。私は、本学薬学研究科修了後、神戸学院大学薬学部、アムステルダム・フリー大学化学部、神戸大学病院薬学部など、多様な薬学分野における教育研究に携わった後、平成8年母校に新設された大学院医療薬学専攻医薬品情報学講座の助教授に就任し、現在に至っております。医薬品情報学は薬学の中でも新しい学問分野で、医薬品や化学物質の有効性・安全性情報を収集・整理した後、情報科学的手法を用いて解析・予測して、科学的根拠に基づく医薬品の適正使用や育薬に利用することを目指しています。最近では、市民参加型の妊娠と薬に関する安全性情報共有システムを構築し web 上で試験公開しています。今後は、これまでの経験と

実績を活かして新しい6年制薬学部と大学院教育研究に全力で取り組み、優秀な臨床薬剤師と臨床薬学研究者を育成するため微力を尽くして参りたいと存じます。今年度秋には病院内に研究室を移し、お薬相談等の大学病院業務の一端を担う予定ですので、なお一層のご支援とご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



医薬品病態生化学分野 教授

山崎 哲男

Tetsuo Yamazaki

平成21年12月16日付けで、医薬品病態生化学分野の担当を拝命いたしました。前任者である樋口富彦先生が築かれた伝統ある教室を引き継ぐにあたり、身の引き締まる思いです。私は平成3年に千葉大学医学部を卒業し、2年間の臨床研修後、同大学院に進学いたしました。以降、炎症性疾患の根底に迫りたいとの思いを胸に、自身の非力さに打ちのめされつつも基礎医学研究に愚直に携わって参りました。主として個体モデルを用いて、リンパ球の生理にアプローチしております。前任地、京都大学では縁有って薬学研究科に所属したことで、異分野間の接点で研究する意味合いを身をもって学びました。私達の研究室は医歯薬合同の新研究棟への引っ越しを今秋に控えております。領域横断的テーマに挑戦する良い機会でもありますので、より一層臨床

現場への還元を意識した基礎研究を展開する所存です。教育に関しましては、当分野は臨床薬学講座の一翼として、本年度スタートの臨床実習を担当いたします。この薬学教育の一大変革点に自身の臨床医経験を生かせればと考えております。幸い、蔵本キャンパスには医学部ならびに歯学部が同居しています。薬学部学生が他学部と積極的に交流できるように、この物理的な近さを生かしていきたいと思っております。将来的に医療チームを構成する人材が「同じ釜の飯を食う」ことは、学生にとってなにより財産になると確信しています。最後になりましたが、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



製剤設計薬学分野 教授

斎藤 博幸

Hiroyuki Saito

この度、平成22年4月1日付けで嶋林三郎教授の後任として、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 生体情報薬科学部門 分子情報薬学講座製剤設計薬学分野 (旧 製剤学) を担当させて頂くこととなりました。本誌面をお借りしまして、自己紹介かたがたご挨拶させていただきます。

私は、昭和61年に京都大学薬学部 (薬品物理化学研究室) を卒業後、病院薬剤師、製薬企業での製剤基礎・開発研究、厚生労働省国立医薬品食品衛生研究所での医薬品品質保証・評価研究、ペンシルバニア大学医学部・フィラデルフィア小児病院研究所での脂質代謝制御タンパク質に関する研究などの経歴を経た後、平成17年に神戸薬科大学薬品物理化学研究室に教授として着任し、薬学における物理化学分野での教育に取り組むとともに、主にリポタン

パク質代謝系をターゲットとした血中及び脳内脂質輸送システムの物理化学的基盤解明に関する研究を行って参りました。製剤学も含めた物理系薬学分野は、医薬品の安定性や生体内挙動の解析、生体分子の構造・機能解析などの創薬研究領域の基盤となるばかりでなく、薬剤師として臨床現場で薬を扱う上での基礎知識ともなり、医薬品と生体との関わりを学ぶ薬学の基底をなす分野であると考えております。私のこれまでの経験を生かし、徳島大学薬学部における製剤物理化学分野での教育・研究の発展に微力ながら尽力させて頂きたいと考えておりますので、皆様のご指導とご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。



神経病態解析学分野 准教授

笠原 二郎

Jiro Kasahara

平成21年12月1日付、神経病態解析学分野 (旧病態神経薬学) の准教授に着任しました。私はこれまで理学→医学→工学→薬学と動いていますが、一貫して中枢神経細胞の Ca^{2+} シグナルと脳機能や疾患との関係を研究しています。九州大 (杉山博之教授) ではツメガエル卵母細胞の発現系を用いた受容体解析法や、初代培養ブルキン工細胞を用いたパッチクランプ法を学び、熊本大 (宮本英七教授) でカルモジュリンキナーゼ (CaMK) カスケードの特徴を、生化学・生理学・組織学的に研究しました (CaMK研究のバイオニア山内卓先生がおられた現職場に来て大変光栄に思います)。MIT (林康紀博士) では海馬スライス培養を用いたパッチクランプや遺伝子導入、新規ポリマーの機能評価を、東北大 (福永浩司教授) では行動薬理学も導入して抗うつ薬の薬効

発現や気分障害に関わる分子機構の研究を始め、関連してイタリア・ミラノ大学の M. Popoli 博士らとも10年にわたり共同研究を行っております。現所属分野では、荒木勉教授の研究テーマである中枢神経変性疾患の分子病態・治療薬研究を支えると共に、精神疾患の基礎研究という柱も確立すべく努力しています。教育は薬理学や機能形態学などの講義を経験し、新たに生化学を担当します。また薬学 OSCE 等の実務関連事前教育にも積極的に携わりますので、今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

(略歴) 九州大 理 生物卒 (1994)、同院理 生物 修士 (1996)、同院医 分子生命 博士中退 (1997)、学振 DC1 研究員 (1996)、熊本大 医 第一薬理 助手 (1997-2001)、マサチューセッツ工科大 CLM ポスドク 学振海外研究員 (-2002)、東北大 薬 薬理 助手 (-2004)、同講師 (-2009)。博士 (理学：2000九州大)。

新任教員等紹介



臨床薬学実務教育室 助教

杉村真由美

Mayumi Sugimura

平成22年3月1日より、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 臨床薬学実務教育室の助教を担当させていただくことになりました杉村真由美です。私は、平成17年に本学医薬品情報学の博士前期課程を修了後、香川県にあり、KKR（国家公務員共済組合連合会）高松病院にて、病院薬剤師として4年半勤務してまいりました。病院では、調剤室業務・DI業務・抗がん剤混注業務・注射剤調剤業務・病棟での服薬指導業務などを担当しておりました。2007年より、総合内科の外来診察室にて医師と共に業務を行い、診察待合室での服薬指導業務も行ってまいりました。また、臨床試験コーディネーター（CRC）としての治験のサポートや医師主導型臨床試験のサポートなども行ってまいりました。4年半のあいだには、ICT（院内感染対策

チーム）、疼痛緩和ケアチーム、NST（栄養サポートチーム）、呼吸療法委員会など多くのチーム医療にも参画し、病棟回診やミーティングを通して、医師・看護師・コアスタッフとのチーム医療の必要性・重要性を学びました。

平成18年度より薬学部6年制がスタートし、本年度より長期実務実習が始まります。私は、4年半の病院薬剤師としての実務経験を生かし、より現場に近い形で薬学教育に携わり現場で必要とされる薬剤師育成に少しでも貢献したいと考えております。実務経験も浅くまだまだ未熟ではございますが、精一杯頑張りたいと考えておりますので、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

薬学部関連ニュース

学会賞等受賞

■2009年度 日本薬学会中国四国支部奨励賞

受賞者所属・氏名：薬品製造化学分野 助教 宮本 和範
 受賞年月日：平成21年11月8日
 表彰団体名：日本薬学会中国四国支部
 受賞内容(課題名)：ヒドロキシー- λ^3 -ヨードン・クラウンエーテル錯体の合成とその特性を活用した合成反応の開発研究

■2009年度 有機合成化学協会研究企画賞

受賞者所属・氏名：薬品製造化学分野 助教 宮本 和範
 受賞年月日：平成22年2月19日
 表彰団体名：有機合成化学協会
 受賞内容(課題名)：ヨードアレーンを有機触媒として用いるビニル位 SN2反応の開発研究

■ KAMETANI AWARD 2010

受賞者所属・氏名：有機合成薬学分野 教授 穴戸 宏造
 受賞年月日：平成22年5月24日
 表彰団体名：The Japan Institute of Heterocyclic Chemistry and Elsevier
 受賞内容(課題名)：For Outstanding Research In Heterocyclic Chemistry And Contributions to the Heterocycles.



編集後記

薬学部だより第6号をお届けいたします。前回の薬学部便り発行の後、5名の新任の先生方が薬学部へ赴任されました。薬学部に新たな息吹を吹き込み、薬学部発展にご尽力いただけるものと確信しています。さて、高石学部長の長井長義先生に関する文章があります。学部長は触れられていませんが、長井長義先生に繋がる学問の系譜が徳島大学に流れていることをご存知でしょう

学会等案内

■第117回日本薬理学会近畿部会

開催責任者：福井 裕行
 日時：平成22年7月8日(木)
 会場：徳島県郷土文化会館（あわぎんホール）
 問い合わせ先：徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部
 分子情報薬理学分野内
 第117回日本薬理学会近畿部会事務局
 (担当：水口)
 TEL：088-633-7264 / FAX：088-633-7264
 E-mail：kinki117@ph.tokushima-u.ac.jp

■第38回構造活性相関シンポジウム (同時併催：第33回情報化学討論会)

日時：平成22年10月30日(土)～10月31日(日)
 会場：徳島大学工学部共通講義棟（5-6F）
 (徳島市南常三島町2-1)
 主催：日本薬学会構造活性相関部会
 共催：日本化学会、日本農芸化学会、日本分析化学会、日本農薬学会
 実行委員長：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
 教授 中馬 寛
 問い合わせ先：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
 生体情報薬科学部門 分子情報薬学講座
 創薬理論化学分野 中馬 寛
 TEL：088-633-7257
 E-mail：hchuman@ph.tokushima-u.ac.jp

か？ 高石先生（5代）、落合先生（5代）、佐野先生（6代）、南川先生（6代）そして大高（5代）〔（ ）内は長井先生を初代として数えて〕となっています。長井先生以外の大きな学問の系譜もあります。学問の系譜への学生諸君の参加を期待する次第です。

(薬学部広報委員長 大高 章)

発行：徳島大学薬学部

編集：薬学部広報委員会

広報委員：大高 章、福井裕行、植野 哲、吉田達貞

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募下さいませよう御願いたします。次回の発行は、平成22年の12月を予定しております。なお、広告を広く募集しております。

URL：http://www.ph.tokushima-u.ac.jp/

〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1

徳島大学医学・歯学・薬学部等事務部総務課第三総務係

E-mail：isysoumu3k@jim.tokushima-u.ac.jp